

ドクターの肖像

第3回

東海大学医学部長

黒川 清

P R O F I L E

(くろかわ・きよし)

- 1936年 東京生まれ
- 1955年 成蹊高等学校卒業
- 1962年 東京大学医学部卒業後、同大学医学部付属病院インターン
- 1963年 東京大学医学部第一内科 / 医学研究科大学院 (医学博士)
- 1968年 東京大学医学部第一内科助手
- 1969年 ペンシルバニア大学医学部生化学助手
- 1971年 UCLA (University of California at Los Angeles) 医学部内科上級研究員
- 1973年 UCLA医学部内科助教授
- 1974年 University of Southern California医学部内科準教授
- 1977年 UCLA医学部内科準教授
- 1979年 UCLA医学部内科教授
- 1983年 東京大学医学部第四内科助教授
- 1989年 東京大学医学部第一内科教授
- 1996年 東海大学教授、医学部長
- 1997年 東京大学名誉教授
- 1999年 紫綬褒章受勲

UCLAの教授の地位を棄て
日本を変えるために戻ってきた

撮影：田中 誠
文：及川佐知枝

アメリカ留学で研究の醍醐味を知り
日本の医師社会のヒエラルキーから離脱

「何でも聞いてください」
挨拶を終えた直後の、それが黒川氏の第一声であった。

米国在住14年、UCLAの教授にもなり、国際的な内科学と腎臓学の権威。そして現在、東海大学医学部長の黒川清氏の取材とあって、現場の空気も緊張に満ちていた。しかし、このきさくな一言により和やかな雰囲気インタビューはスタート。何を聞いても歯切れよく答えてくれる黒川氏の話しぶりに、氏の率直で潔い生き方そのものが現れているように感じられた。

黒川氏は、曾祖父が細川藩（熊本県）の侍医、祖父は熊本病院の内科医長、そして父は東大呉内科勤務（後に新宿で開業）という、医系家族の長男として育つ。このような環境にあって、黒川氏が医師をめざしたのは、当時としては、ある意味必然のことであったのだろう。

「2人の弟たちは、僕が東大の医学部に進んだら、

安心して好きな工学部への進学を決めていましたね」

東大を卒業してから7年間、同大学のインターン、大学院、助手などを務めた後、アメリカのペンシルバニア大学に留学。大部分の医師留学生がそうであるように、黒川氏も、3年のリサーチ・フェローをして帰る予定だった。しかし、そこで転機となるペンシルバニア大学のラスムッセン教授との出会いがある。

初対面で教授から言われた「留学したのは君自身のため。君が研究をするためだ。自分で考え、自分の好きな研究をしてみなさい」という言葉が、黒川氏の心に響いた。日本では感じられなかった真の研究のあり方に目覚め、それから2年間、生化学の研究（腎臓の細胞機能がいかにして調節されるか）に没頭する日々が続く。

「研究がこんなにももしろいとは思いませんでした。日本での徒弟制度的な環境で、単位を取るだけの研究とはまったく違う」

アメリカのオープンで、実力のある者に公平なシステム、そして何より学生、研修医、フェローのみ



1969年、ペンシルバニア大学のラボのあるビルディングの入り口で、息子さんと



1987年、18年後上の写真と同じ場所で

なが旺盛な向上心を持っている雰囲気が入り、黒川氏の帰国は1年、2年と先送りされていた。

1971年、UCLA（カリフォルニア大学ロサンゼルス校）の医学部内科上級研究員、1973年には同校の医学部内科助教となるわけだが、帰国のタイミングをめぐる葛藤は激しかったに違いない。

日本では、卒業後ほとんどの医師は卒業した大学が、有力な紹介者の口添えのある大学の医局に入り、数年間研究をした後、大学の関連病院でキャリアを積むというステップがある。たとえ留学しても、それは2〜3年程度のものという暗黙の『しきたり』が存在する。それ以上の長期間を独断により海外で過ごせば医局のシステムから離れざるを得ない。これはつまり、日本での封建的な医師社会のヒエラルキーからの離脱を意味する。帰国後の将来の保障を失うことになるのだ。

カリフォルニア医師免許を取得
取れるライセンスはすべて取る

「失敗しなきゃいけないと思って人生やってもつ



1995年に恩師であるUCLAのKleeman教授と



ドクターの肖像

まらないじゃないですか。先のことをいろいろ計算

したってね、何が起るかわからない。与えられた状況でベストを尽くすことがいちばん大事なんですよ。まわりはそれを評価するだけなんだから。たとえば僕みたいにアメリカで14年、向こうの医師免許も取り内科教授にもなつて、今度は日本に帰ってきて東大の教授になる。そうすると『先生は好きに生きていらつしゃって、いいですね』と言つ人たちがたくさんいる。だけど、それは結果でしかない。『じゃあ、そのつもりになつてアメリカで10年以上やってみたら』と言つたら、きつと誰も行かないでしょ」

たしかに誰も行かないだろう。日本における医師としての将来を棄てるだけではない。実力主義のアメリカでそれなりの地位を築くには、想像を絶した努力が必要とされるからだ。

黒川氏は、まず日本の医師免許はアメリカでは通用しないためカリフォルニア医師免許を取得し、米国内科専門医、米国内科腎臓専門医など取れるライセンスを次々と試験を受けて取得する。また腎臓に関する研究発表をし続け、ティーチングや臨床でも高い評価を得る。

「もちろん、不安がなかつたわけじゃない。日本と違って雇用が安定してないし、いつクビになるかわからない。僕のキャリアとかではなくて、家族のことで悩むこともありました。子どもが大学を卒業するまでは、彼らの生活を支えなくちゃいけない。もし来年働く場所がなかつたらどうしようと思つて真剣に考えました。日本に帰つて親父の病院を継ぐとか、勤務医になるとか、そういう選択肢もありましたが、どうしてもそれだけはしたくなかつた。今さら帰れませんよ」

「いざとなつたら焼き鳥屋でもしようと思つた。ロスには吉野屋の牛丼はあつたけど、焼き鳥屋は一件もなかつたんだよね。そのころは」

「このように笑いながら話すが、ふと真顔になつて、『やっぱね、もしうまくいかなくても自分の最低のラインはどいなんだと決めていなければ、アメリカという異国で生活するのは易しいものではないですよ。守らなければならぬもの、僕の場合それは家族と自分のプライドだつただけね』。そのためどこまで、腹をくくれるのか。自分の中で見極めておかななくちゃいけない」。

アメリカでの成功を棄て

日本に帰国し母校東大へ復帰

そして、そういう覚悟があつたからこそ黒川氏は並大抵では得ることができない成功を手にする。学会やセミナーでも注目を浴び、渡米して10年目の1979年、UC L Aの内科教授となる。

「ようやく、アメリカでの生活も安定してきて、高台にプールつきの家を買つた。子どもたちもこのびり育つてくれて、休日に庭のプールに入って空に浮かぶ雲を見上げながら、まさに『This is Happiness』と一いつ感じでした」

そんな生活を築きながら、14年ぶりになる1983年、黒川氏は東大の助教授として日本に戻る。収入は約半分、日本の住宅事情ではプールつきの家とは到底いれない。それでも帰国を決めた理由とはなんだつたのか。

「東大第四内科の尾形悦郎教授がわざわざ口説きに来てくださった。』とついても帰つてこなくちゃダメだよ。これからの東大にはあなたのような人が必要だ』と、僕が首を縦に振るまでは帰らないという決意で、説得されたんです。そこまで言つてくだ

さったのは、やはりありがたかった。最終判断をするには、ほかに理由がありました。当時15歳の息子と10歳になる娘の2人は、日本語と英語の両方を話すバイリンガルなのですが、日本に住んだことがない。だから日本について実体験としては何も知らないんですね。自分の固有の文化を知らないことは、マイナスになる。文化についても子どもたちには、バイ・カルチャーになってほしかった」

人情に厚く、子ども思いの父親としての素顔もので、一度は「アメリカ社会」に入り、日本に戻らないつもりでいた黒川氏。それが帰国して、再び母校の東大に復帰するのには、言葉にはしませんが並々ならぬ覚悟と目的があったに違いない。帰国の目的。それはかつてから黒川氏が疑問に感じていた、日本の医学教育のシステムを改革することではなかったのだろうか。

日本の唯一の資源は「人」

医学教育の再構築に挑戦

「東大に戻ってまず感じたのは、学生たちがすば

らしく優秀だということ。目も知的欲求で輝いている。でも一人前のドクターになる過程で、その目がどんよりしてきてしまうんですね。なぜか。希望を持って入社した若者が、会社組織が企業の論理と呼ばれる理不尽なシステムで成り立っていることを知って疲弊していくのと同じです。大学の医学教育の現場が、閉鎖的な医学界という『ムラ社会』の温床になってしまっている。せっかく優秀な学生がたくさんいるのに、もつたいない。それを生かせないシステムは変えていかなくちゃいけません。日本は資源を持たない国。唯一の日本の資源は、人しかありません。だからこそ、次の世代の人間を育てることが何よりも大事なんです」

日本の医学教育の再構築へ向けて、黒川氏の挑戦が始まる。

「大学の医学部にいる先生は、臨床と研究と教育の3つをされると言われるが、同時に3つするわけじゃないことをもって理解すべき。オスラー博士も言っていますが、40歳までは研究、40歳を過ぎたら教育が最重要となります。年代によって積むべきキャリアの重点は違ってくる。大学にいる人間としての

プライオリティが何なのか、大学で医学教育に携わる人たちにもっと考えてほしいことです」

アメリカで14年、海外の医学教育も熟知した黒川氏の教育者としての手腕は、日本の医学教育の現場でいかに発揮されることになる。学生の短期留学、ハーバード大学の教授を招いたプログラム作り、米国流の講義手法の導入などさまざまな黒川流の医学教育が展開された。

これらはいずれも、学生たちから「ひそやかな」な支持を得、今でもしっかりと受け継がれている。黒川氏の業績は高く評価され1989年には、第一内科の教授に就任。外国の教授が東大の医学部内科の教授になったのはこれが初めてのことであった。

日本初のスカウト人事で

東海大学医学部長に

その東大教授を退官直前に辞し、1996年東海大学の医学部長に移籍して周囲を驚かせたのはまた記憶に新しい。

「退官が間近になり、いくつかの病院から院長に

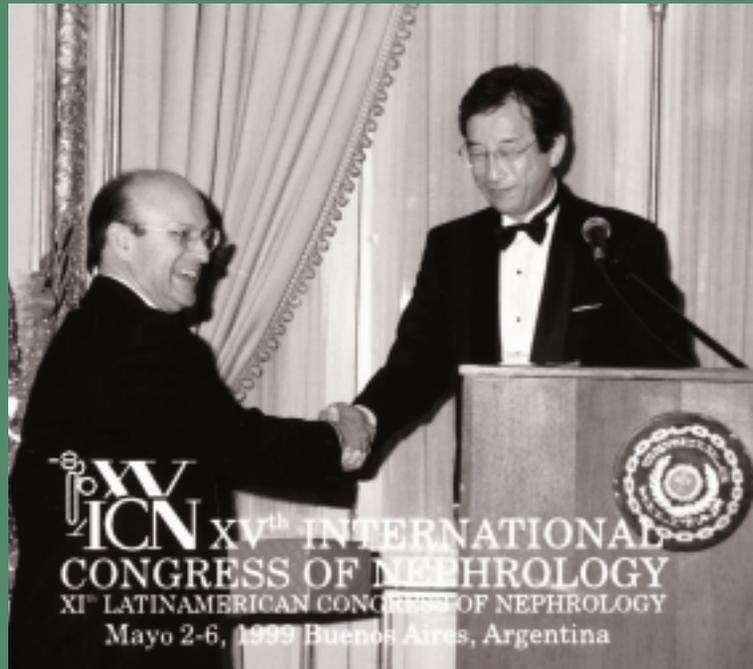
「日本の唯一の資源は、人なんです。だから、次の世代の人間を育てることが何よりも大事」



1985年、東京大学第四内科で開かれた黒川氏のパースデーパーティーの様子

と声を掛けてくれるところもあったが、自分にそのつもりはまったくなかった。今この日本で僕がしなければならぬことは教育だと思っていましたから。病院の院長もおもしろい仕事だろうけれど、僕じゃなくてもできる。人材もいくらでもあります。でも、教育に関しては、アメリカと日本の両方の医学教育を身をもって実体験し、知っている人は極めて少ない。自分だからこそできる、しなければならぬことがある」

そんな風に考えていたところへ、東海大学から医学部長に迎えたいとの話がある。このように他大学の教授をスカウトして医学部の部長にしようとする試みは、日本の医学系の大学としては初めてのことで、『ムラ社会』で噂がたち、本質とは無関係なわずらわしい問題が起ころのを避けるため、OKの返事をしてからわずか3カ月後に黒川氏は東海大学へ赴任した。



1999年の国際腎臓学会（ISN）のプレジデント・ディナーで

医療制度の現状にも一石を投じ 日本の教育全般を愁う

高騰する医療費が医療財政を圧迫し、病院側のコスト削減と患者側への負担増が求められている現在の日本の医療制度。教育のみならず、このような医療を取り巻く大きな社会問題についても、黒川氏はメディアや公的委員会を通じて一石を投じている。

「国民皆保健制度の元では、誰もがどこでも安い費用で診療を受けることができた。これはある意味優れた制度ではあったけれども、うまくいっていたのは高度経済成長に支えられていたから。経済が行き詰まっている現状では、歪みが生じるのは当たり前。しかも高齢化社会になり、疾病構造も変わった」

今の医療界で大きな問題のひとつは、患者の負担額が低いいため診療を受ける際にコスト意識が働か



娘さんのハーバード大学の卒業式で親子3人のスナップ

ず、病院のハシゴを平気でして数カ所の病院で同じ薬をもらったり、同じ検査を受けたりすること。病院側では、そんな患者でも診れば利益になるので、やたらに検査をして薬も出す。ここで莫大な医療費の無駄が発生している。また、医師のキャリアに関係なく、診療報酬が横並びであることも、問題を大きくしていると黒川氏は話す。誰が診療しても同じ報酬であるならば、医師のインセンティブが下がるのも当然だ。これでは医療の質は上がらない。

「日本の医療費はGDP（国内総生産）に比べると7%台と先進国G7の中ではイギリスと並んで極めて低い。しかし65歳以上の人は6人に1人と高齢化の割合はG7でいちばん高いですね。高齢者が増えれば医療費が上がるのは当たり前で、それを抑えようという発想そのものが間違っているといか言いようがない。むしろGDPの10〜15%くらいをめざして、そこにアメリカのように医師のインセ

ンタイプが上がるようなマーケット原理を取り入れ、医療を含んだ『広義の健康産業』を展開すべきです」

また医学に限らず、日本の教育の全般的な現状に黒川氏は危機感を抱いている。

「次の世代を育てないと日本の将来がないんじゃないかと心配になる。ここ数年国際腎臓学会の役員をしていて世界各国をまわっているんですが、その思いは増大するばかりです」

日本はアジア圏において、経済大国であり最も「近代化」が進んでいる国だと、日本国民は思っているかもしれない。しかし現在、アジア圏の国々の経済成長は目覚しく、リーダーとなる多くの人材は、ヨーロッパ特にイギリスやアメリカの高等教育に学び、英語を話し、それらの文化を吸収している。一方日本をかえりみると、国民のほとんどは最

アで、そして世界で異質な国、取り残されていくのは明らかではないか。世界における日本の姿を知っている黒川氏だからこそその指摘である。

辛辣な言葉の裏に溢れる日本への愛情

これまでも多くのメディアで黒川氏は、日本の旧態依然としたさまざまなシステムに対して歯に衣着せぬ発言をし、革新的な提言をしてきた。これらの批判的な言葉が、時として人の誤解を生むこともあったかもしれない。しかし黒川氏は自分しか、実験に基いてものを言う人間がないという強い使命感に突き動かされて発言している。短いインタビューの時間であったが、黒川氏の言葉の端はしには誰よりも強い日本への愛情が溢れていることが感じられた。愛情が強いがゆえに、語気も強くなってしまうのだろう。

そのことを黒川氏に告げると「そういうことは

あるかもしれないね」と、ちょっと照れて笑う。海外にいる日本人は、国内にいる人よりも日本や日本人であることを強く意識する。海外での生活が長かっただけに、黒川氏には日本の矛盾がくつきりと見え、ふるさとである日本の衰退していくのさながら、どうしようもなくはげしく思われるに違いない。

「利根川進さん（米マサチューセッツ工科大学教授）と2人で話すと、異常に盛り上がる。日本の悪口で、あそこはこうしたほうがいい、こういう仕組みは間違っている……。話が終わらなくなっちゃう（笑）。そうして結局は『俺たち本当に日本を愛しちゃってるんだね』という結論で話が終わるんですよ」

経済は行き詰まり、混沌とした状況のまま2000年を迎えた日本。黒川氏のような人物こそ、今必要なのだ。16年前、黒川氏がもしあのままアメリカから帰国しなかったならば、日本は取り返しのつかない大きな損失をしたことになっただろう。



黒川氏の言葉の端はしには誰よりも強い日本への愛情が溢れていた。

ドクターの肖像